

第1回（令和5年度） おおた地球さんご賞 作品集



【多摩川：
うのき水辺の楽校の活動】



【大森第六中学校
ヘイケボタルの放流】



【大森海苔のふるさと館による
竹ひびたて】

主催：一般社団法人水のもり文化プロジェクト

共催：大田区教育委員会

文章は人である

Le style est l'homme meme

— アカデミー・フランセーズ —

文は人なり

自分の考えを文章に書くと、色々なことがあいまいなままであることに気づく。正しく見ているか、正しく考えているか。深く見ているか、深く考えているか。そういう力を日頃から身につけている人が、いい文章を書ける。

— 安部 龍太郎 —

地球さんご賞の趣旨

生命の源である「水」を主題に、「生命」「環境」の大切さを理解し、自助、共助の精神で行動できるこどもの育成を目指して、創設する事業です。同時に大人たちがこの活動を通じて子どもたちと交流し、地域と地域のために何ができるかを発見する場にしたいと願っています。

地球さんご賞の理念

環境保護活動

子どもたちに水や環境についての作文を書いてもらうことで、環境問題への意識を高め、将来の「環境保護活動」につながるきっかけを作りたい。

子育て支援運動

全国の水のもり文化プロジェクトに共感いただく団体と共に作品の募集、選考、表彰を行い、大人たちが子どもたちと活動を共にすることで、地域社会における「子育て支援運動」へと発展させていきたい。

地域人財育成

活動を通じて、地域の意識を高め、子どもたちに郷土の自然や歴史を学ぼうという意識を持たせることで、地方分権を担う「人材」を育成したい。

地域の活性化

高齢者が水のもり文化プロジェクトに参加することで、学び直しや社会参加、生きがい作りのきっかけとなり、「地域の活性化」につなげていきたい。

社会問題に取り組む体制

環境問題、子育て支援、社会教育などに携わる他の団体にも協力をお願いし、作品の応募や選考、表彰を行うことで、共同で「社会問題に取り組む体制」を作って行きたい。

大田区在住の直木賞作家安部龍太郎氏から、地球さんご賞の事業を大田区の子ども達にも参加を呼びかけ、大田区教育委員会との共催実施の打診をいただきました。大田区教育委員会は、安部氏の取り組みに共感し、連携して実施していくことを決定いたしました。

2013年「等伯」で第148回直木賞を受賞された安部龍太郎氏。直木賞受賞10年目の2023年、「おおた地球さんご賞」作文・エッセイコンクールがスタートしました。

安部龍太郎さんからの応募いただいたこどもたちへのメッセージ

「子どもは未来を照らす宝である」

第二回地球さんご賞には、全国で四千六百二十四作の応募がありました。

作文を寄せてくれた小・中学生、各地の実行委員会・自治体の方々、ご支援をいただいた企業や個人の皆様に厚く御礼申し上げます。

子どもたちの作文を読むと、同様の活動を始めた二十年前より環境問題についての意識が格段に高まっていることを実感します。それは子供たちが日常的に危機が迫っていることを感じ、何とかしなければという意識を持っているからだと思います。

子どもは未来を照らす宝です。この宝が輝くためには、自分の中に無限の可能性のあることを自覚することが何より大切ではないでしょうか。見る、考える、行動するという体験を重ねることで、可能性の扉はより大きく開きます。作文を書くことがそのきっかけになるように願って、これからも地球さんご賞の活動をつづけていきましょう。

皆様のご協力、ご支援をお願いいたします。

安部 龍太郎

「おおた未来づくりと共通する視点」

区内在住の直木賞作家安部龍太郎様からのお声掛けをいただき「第一回 おおた地球さんご賞」作文・エッセイコンクールを開催することができました。大田区では、小学生 110 作品、中学生 364 作品のご応募をいただきました。小学生は、身近な自然環境である多摩川や洗足池、呑川などのことを作文の中で表現し、その地域の環境保全について自分の意見を書いています。中学生は、身近な環境から地球環境まで見据えた、これからの自らの行動について述べられており、感動いたしました。

安部龍太郎さんが提唱される“子どもは未来を照らす宝である”という言葉に込められる気持ちが伝わる取組みであり、大田区教育委員会としても全面的に協力させていただきました。また、本区教育委員会では、令和 5 年度から『おおたの未来づくり』という区独自の教科をスタートしました。ものづくり企業や商店街、プロスポーツ団体、伝統文化、歴史、環境など、大田区の地域特性を学び、未来の地域を見据えた創造性あふれる児童の育成を目指すものです。「おおた地球さんご賞」と共通する部分があります。

ますます、この取組みが発展していくよう、教育委員会としても応援してまいります。今後とも、地域の皆様、企業、団体等の皆様のご尽力・ご協力を賜りたくお願い申し上げます。

大田区教育長 小黒 仁史

ご後援（敬称は省略させていただきます。）

- ・ 公益財団法人伊東奨学会
- ・ 公益財団法人大田区文化振興協会

ご協賛

- ・ 株式会社荏原製作所
- ・ 学校法人簡野学園
- ・ 株式会社永谷園
- ・ 株式会社ヒダロジスティックス
- ・ 総合警備保障株式会社

ご協力

- ・ Honda ハローウッズ 森のプロデューサー 崎野隆一郎
- ・ 有限責任監査法人トーマツ

<<< 目 次 >>>

賞名	作品名	お名前	学校名・学年	ページ
大田区長賞【小学生の部】	ぼくと呑川	末岡 寛都	文教大学付属小学校 3年	1
大田区長賞【中学生の部】	発展と環境と私	丸山 泰生	大森第六中学校 2年	2
大田区教育長賞【小学生の部】	自然や海を守るということ	大野 百花	清水窪小学校 4年	3
大田区教育長賞【中学生の部】	私が見た浜辺	柳葉千早紀	雪谷中学校 2年	4
おおた地球さんご賞大賞	未来からの手紙	桶谷 樹志	嶺町小学校 4年	5
おおた地球さんご賞準大賞	惑星大会議	松浦 理桜	大森第六中学校 3年	6
〃	壊しているのは「未来」	藤牧 宗佑	大森第六中学校 3年	7
(公財)伊東奨学会賞	みんなの多摩川を大切にしよう	玉岐 祐世	南六郷小学校 4年	8
(公財)大田区文化振興協会賞	水生昆虫という宝物	吉田 孝太	大森第六中学校 3年	9
荏原製作所賞	自分以外の全てのために	朝日 奏多	志茂田中学校 1年	10

奨励賞【小学生の部】

作品名	お名前	学校名・学年	ページ
美しい海を取りもどす責任	中尾 堇	馬込小学校 6年	12
プラスチックから海を守る	原 杏奈	清水窪小学校 4年	12
多摩川を守るためにできること	柳井 美紘	南六郷小学校 4年	13
多摩川をいっしょにきれいにしよう	高橋 薫名	南六郷小学校 4年	14
身近な自然を守りたい	米本 凱飛	文教大学付属小学校 3年	15
ゴミがあふれる海	山本 優維	昭和女子大学付属昭和小学校 5年	16

奨励賞【中学生の部】

作品名	お名前	学校名・学年	ページ
さんご	大村 瑞奈	雪谷中学校 2年	17
大田区と地球環境	村上 遼真	大森第十中学校 2年	17
本当は身近な水不足問題	中山 柚乃	大森第十中学校 2年	18
変わる空気	島 一斗	大森第六中学校 3年	19
地球を守るはじめての一步	浅島 花香	大森第六中学校 3年	20
僕にとっての当たり前。 君にとっての当たり前？	檜作 優斗	大森第六中学校 3年	21
光る海	福島 一穂	大森第六中学校 3年	21
小さな意識の積み重ね	後藤 結衣	大森第六中学校 3年	22
ひとりぼっち	A. F	大森第六中学校 3年	23
海	小山 貴子	大森第六中学校 2年	25
洗足池の未来	三浦 悠太	大森第六中学校 2年	25
海を守るために	遠藤 彩加	大森第六中学校 2年	26
白いサンゴと地球温暖化	川田 あさひ	大森第六中学校 2年	27
海に捨てられたゴミ	山本 楓	大森第六中学校 2年	28

実行委員会特別賞

みんなのたまがわ	立花 佳奈	嶺町小学校 1年	29
----------	-------	----------	----

大田区で入賞された 30 作品については、全国（本部）表彰に推薦をさせていただきます。令和 5 年度は全国 4 地区（福岡県八女市、岡山県高梁川周辺、静岡市、大田区）で、「地球さんご賞」作文コンクールが実施され、全国で 4,624 作品の応募がありました。各地区での入賞作品が 30 作品ずつ寄せられ、本部での選考結果を経て、令和 6 年 1 月 9 日（火曜日）入賞作品が決定しました。大田区からも、下記の 4 つの作品が入賞しました。

令和 5 年度「地球さんご賞」本部 優秀賞 10 作品

安部龍太郎賞、萩原浩賞、川井郁子賞など、優秀賞として 10 作品が選ばれました。その中で、ふるさと賞に大田区から推薦した中から、下記の作品が選ばれました。

◆ふるさと賞

学校名・学年：大田区立大森第六中学校 3 年 氏名：吉田 孝太
作品名：水生昆虫という宝物

令和 5 年度「地球さんご賞」本部 奨励賞

本部奨励賞は、全体で 20 作品が選ばれました。その中で、大田区から推薦した 3 つの作品が選ばれました。

◇奨励賞

学校名・学年：大田区立大森第六中学校 3 年 氏名：後藤 結衣
作品名：小さな意識の積み重ね

◇奨励賞

学校名・学年：大田区立大森第六中学校 3 年 氏名（ペンネーム）：A. F
作品名：ひとりぼっち

◇奨励賞

学校名・学年：大田区立嶺町小学校 4 年 氏名：桶谷 樹志
作品名：未来からの手紙

※ 地球さんご賞本部（全国）表彰作品は、
右の QR コードからご確認ください。



■大田区長賞【小学生の部】

ぼくと呑川

末岡 寛都

いつもバスや電車から見る多摩川は、広くて青い大きな川です。川に夕日が当たると、とてもきれいで、ぼくは川がすきです。

ぼくは、毎日学校に行く時、呑川のそばを通ります。でも呑川は、少しよごれていて、いやなおいがする時があります。だから、そばを通る時は、少し小走りを通ることが多いです。そんな呑川にも生き物がすんでいることをぼくは知っています。

ぼくは、二年生の時におたの生き物はつけん隊の活動で、六郷用水のさんさくをしました。六郷用水には、カメやカモ、コイ、アメンボ、きれいな川にすんでいるといわれるカワニナも見ました。六郷用水の水は、とう明できれいだったので、すむ生き物たちは、気持ちよさそうだなと思いました。少しよごれている呑川でも、カメやカモ、シラサギなどを見かけます。ぼくは、呑川にすんでいる生き物たちのことで心配なことがあります。それは、呑川にすんでいる生き物たちがまちがえてゴミを食べてしまうのではないかとことです。夏休みに読んだ本の中で、クジラやカメがクラゲとまちがえてビニールぶくろやペットボトルのゴミを食べてしまったり、小さなプラスチックのゴミが川や海のかんきように悪いえいきょうをあたえてしまったたりすることを知りました。ぼくは、いつも通る呑川をきれいにするために、どのようにすればよいのか考えてみました。

まず、ゴミを川や海にすると生き物にどのようなえいきょうが出るのか大人だけではなく、子どもも知ることが大切だと思います。なぜなら、かんきょう問題は、今の人だけでなく、未来の人々にもえいきょうする大事なことからです。絵本や図かんてプラスチック

ゴミのえいきょうをしようかいしたり、ゴミをすてないように注意するポスターを作ってみるのもよいと思います。また、呑川の近くに住んでいる人たちができよう力してゴミひろいをするときれいになると思っています。毎日呑川のそばを通っているぼくもそんな活動があればぜひさんかしたいです。学校のそうじの時間のようみんなできよう力してゴミひろいすれば、川や海のかんきょう問題が身近な問題に感じることができると思います。

ぼくの通っている小学校では、四年生になるとこまっている人を助けたり、かんきょう問題をかい決する活動にさんかしたりすることができます。ぼくは、四年生になったら、川や海のかんきょう問題について、考えてみたいです。身近な川や海のかんきょう問題を考え、行動することは、きっとこれからの地球について考えるきっかけになると思っています。



■大田区長賞【中学生の部】

発展と環境と私

丸山 泰生

私は自然科学部という部活動に所属しており、その部活動では興味のある科学のことなどの研究や、洗足池にホテルを復活させ自生させることを目的とした活動を主に行っている。この中学校では最もSDGsや環境問題に触れている部活動だろう。洗足池で活動をした帰り、友達と歩いていると一人のおばあさんに出会った。そのおばあさんは僕達の活動をほめ、可能ならば街の人たちが参加できるホテルの放流式に参加したいと語った。その人は自分がまだ小さかった頃の話をしてくれた。昔の洗足池では、多くのホテルが飛び交っていたそう。年配の方だったので、かなり昔の話だと思う。ホテルは環境指標生物と言い、水、土、空気が全てきれいでないと生息できない生物だ。私達自然科学部は水質の管理や水中の微生物の研究やデータ収集などを行っている。現状、自生はできていない状況だ。しかし、昔はホテルは自力で生活することができていた。現在までの間に、何があったのか。

大田区の歴史を知る人から聞くと、洗足池周辺はもともと本当に何もない場所だった。その時と比べると、現在の洗足池は人通りも多く、大きい道路もできて交通量が多くなっている。そのため、大気が汚れていることは確かだ。自然科学部の部員が周辺の大気を調べると、汚れていることがわかったらしい。また、水質面でも、現在は大丈夫だが過去にアオコになるなど問題も発生したことがあったらしい。私達に話をしてくれたおばあさんが小さい頃は、おそらく戦後間もない頃だと考えられる。戦後は高度経済成長期で新たなものがたくさん作られ、今のように環境のことを考える余裕などな

かったのだと考えられる。当時の経済成長があったからこそ今の日本国民の裕福な生活があるとも考えられるため、当時の人たちが悪かったと言うことはできないが、国の発展と環境問題の関わりというものは、これから考えていかなければいけないことだと思う。世界中の国の約7割は発展途上国だと聞く。それらの国は、これから少しずつでも発展していこうと努力するだろう。それはとても良いことだと思おうし、当人たちにとってもいち早く発展していかなければならないだろう。しかし、発展のためには資源を獲得する必要がある。そのためにはそれなりに環境が破壊されるだろう。私たちにとってはなるべく環境を守るよう活動してほしいが、私達はその意見をおしつけることはできない。私達が住む先進国も、昔そうしてきたからだ。また、先進国含め数多くの国が発展途上国の資源に支えられている。この問題は、明確な答えがないということが難題だ。

もしも解決策が見つかったとしても、すぐに実行し解決はできないだろう。それでも、私達一人ひとりが意識し、池のホテルを復活させるという小さな目標でも、環境保全を心がけそのための行動をすることはとても意味のあることだと思う。



■大田区教育長賞【小学生の部】

自然や海を守るといふこと

大野 百花

私は、自然が大好きです。植物に囲まれていると、とてもいい感じがよくて気持ちがよくなります。だから、私は、たまに目黒駅の近くにある自然教育園に行っています。そこは、とてもきれいなところで、私は大好きです。

ですが、その園に、少しごみが落ちていました。それも、植物の近くにごみが落ちていて、周りには虫もいっぱいいました。その虫たちがごみを食べるかもしれないと思ったら、「落ちているゴミに対して、私たちに何かできないか。」と考えることが必要だと思いました。

たとえば、ごみ拾いのボランティア活動を試してみてもいいかもしれません。地域で行われるボランティア活動に参加することもいいことだと思います。でも、仕事などで参加するようがない人もいると思います。だから大切なことは、「日ごろからごみをひろう」ことに取り組むことだと思います。

このことは、海でも同じだと思います。なぜなら、夏は、観光客などが多く、たくさんの方がごみを落としていくからです。それを「私はやっていない。」と思い、知らないふりをしている人も、海をよくする原因をつくっていると思います。

実際に、プラスチックごみが多く海に捨てられ、それが原因で、海の生き物がどんどんへっています。それをふせぐことができるのは、人間の日ごろの努力です。海を守るために、私もボランティア活動をやってみようと思う人が、一人でも多くふえていくといいと思います。

私は、海でボランティア活動をしている人を見かけたことがあります。

ます。砂浜の砂の中にごみがたくさんあり、手作業でごみを集めていて、とても大変そうでした。大変だからこそ、みんなが協力して行うことが大事だと思います。

私自身も、ごみ問題に少しでも関わりたいと、3Rを心がけています。3Rとは、リデュース（ごみをへらす）、リユース（くり返し使う）、リサイクル（しげんの再利用）の3つです。最近、3Rともう一つのR、リフューズ（ごみになる不要な物を買わない）というものも心がけています。マイバッグやマイボトルをもつことも、これに関わります。このようなことを心がけるだけで、動物や植物、色々な物や人が助かります。

みなさんもぜひ、自然や海を守るために、自分ができることをやってみてください。一人一人が実行することで、世界は救われます。私も頑張りたいと思います。



■大田区教育長賞【中学生の部】

私が見た浜辺

柳葉 千早紀

四年前のことだろうか。リモコンでチャンネルを切り替えていると、気になる番組があった。そこには、綺麗な海の魚が映し出されていた。ちょうどその頃、私は水族館によく行っており、魚に関心をもっていた。興味にそそれられ、チャンネルを切り替えていた手を止める。しばらく見ているとあることに気がついた。海の「魚」ではなく、海の「ゴミ」がテーマだということに。

内容は、海に流れるプラスチックゴミが及ぼす生態系への悪影響について。魚などがマイクロプラスチックを誤飲したり、ゴミ袋に入ってしまったらしくなってしまうというのだ。

「ウミガメの約五二パーセントがプラスチックを誤飲し——」

私は見るほど心が苦しくなった。多くの海の生き物が知らないところで死んでしまっていること、さらには、その原因となるプラスチックゴミを出しているのが私達人間であるということを知り、情けなく残念でしかたがなかった。

そこで、私は海の生き物のためにかしたいと思い、浜辺のゴミ拾いをするボランティアに参加することにした。

夏の茅ヶ崎の海はとても綺麗だった。ゴミが流れているような海には見えなかった。本当にゴミなどあるのか。そんなことを思いながら裸足で砂浜を歩いていると、足にチクツとした感覚がした。下を見てみると、今自分が見ている光景と、テレビ越しで見た光景が一致した。たくさんのマイクロプラスチックゴミが落ちていたのだ。それは、拾っても拾っても、拾えきれないほどの数だった。さらに、海岸の端から端まで歩いていると、今まで目に入らなかった

ようなゴミがたくさんあった。とても長いゴム管やタイヤ、外国から流れてきたであろう瓶。こんなものまであるのかと思うほど、様々なものが捨てられていた。先程まで綺麗に見えていた海も、なぜか少し悲しそうに見えた。

三時間ほどボランティア活動は終わった。しかし、与えられた三時間という時間はとても短いものだった。もっと拾っていたかったくらいだ。いくらゴミを拾ってもなくならない浜辺の光景を、今でも覚えている。

その頃から、私はできる限りプラスチックゴミを減らすような生活を心がけている。その結果、昔に比べてゴミ箱が大きく感じられるようになった。しかし、この四年間で「海洋ゴミ」という言葉をテレビで何度も聞いた。その度に私は思う。みんなで動かなくてはいけないのだということ。「誰かがやってくれるから」という考えで本当にいいのか。自分の行動は自分の意志で決まる。個々の想いがいくつもの命につながるのだ。

そんなことを思いながら、私は海の中のたくさんの命が輝くことを願っている。



■おた地球さんご賞 大賞 ◇地球さんご賞本部 奨励賞

未来からの手紙

桶谷 樹志

時は二千五十年。地獄のような日々が続いていた。木は切りたおされ、鳥のさえずりも、もう聞こえない。毎日のように気温は四十度を超えていた。そんな中、一人の少年が一通の手紙をかけた。その手紙は少年の想いをのせ、時空をさかのぼり、過去へと向かっていった。

時は変わって、二千二十三年。

ここにも、また一人の少年がいた。名を、たつしという。ぼくは、ニュースから思わず、目をそらした。環境問題について、取り上げていたからだ。ぼくは、悪いニュースがきらいだ。自分まで、いやな気持ちになる。

「自分には、関係ない。」

そう思ううちに、ぼくは、環境問題を軽視するようになっていった。

そんなある日、ぼくに、一通の手紙がとどいた。

「拝啓、ご先祖様」

その手紙に、いっしゅん目をうたがった。だが、その目には、しっかりと写っていた。未来からの手紙が。その手紙にはおそろしい未来が記されていた。その日から、ぼくの生活は変わっていった。まずは小さな事から始めた。しっかりと環境問題に向き合い、ゴミをひろった。いつもでは気づかないゴミまでひろった。だんだんとそのきぼは大きくなっていった。ボランティアにまで参加するほどだ。

昔の自分とはちがったよろこびを感じることは、とてもたつせいかんがあった。

ある日、海へ出かけた。その海は、まるでゴミの海だった。なにだれも気にかけてはいないようすだ。ぼくは何を考えるひまもなくゴミを拾い始めていた。気づくと、もう夕方になっていた。だが、まだ、いっこうに終わらない。

ぼくは、かんばんを立てた。「ゴミ禁止」と書いて。

次の日、海に来てみれば、とたんにむねがいたんだ。ゴミはへるどころかささらにふえている。ぼくは、もう、泣きだしそうになった。その時、かたにぬくもりを感じた。ふりむくと、そこには、きぼうそのもののように、かつて、ボランティアをした仲間がいた。

「いっしょにやろう」

その言葉にぼくはどんな顔をしていたらうか。

泣いていたか、笑っていたか、それがいま分かった。

「どっちもだ。」

それぞれゴミを拾い、声をかけあった。またたくまに、時間がすぎた。

いっしかその海は、ゴミがないことで、いちやく、有名になっていった。

次の日、ぼくは、ひさしぶりに手紙を見た。すると、手紙の内容はかわり、すばらしい、未来の写真があった。心から、うれしかった。



■おおた地球さん賞 準大賞

惑星大会議

松浦 理桜

「今回の議題は、地球に住む人間の環境の扱い方についてだ。赤い炎を身にまとう星、太陽が言う。周りには地球を含む八つの惑星が円になり向かい合っている。水星、金星、地球、火星、木星、土星、天王星、海王星、そして太陽だ。そう、これは星々が年に一度集う大会議である。」

「人間にも呆れたものだ。そう思わないか。」

太陽が星々に問いかけると、

「全くその通りだ。」

と賛同する星々が頷く。一方で、

「人間は誕生して一億年も経っていない。仕方がないだろう。」

と、言う星々も。その中、黙っていた地球が口を開いた。

「その…地球に住んでいる人間の中には良い人たちも多いです。全てが悪いというわけでは…。」

その言葉を聞いた太陽に賛同した星々が口々に

「地球は人間に優しすぎる。」

「我慢することない。」

等と声をかけた。一方で、太陽に反対していた星々は地球の言葉に

「地球の言う通り、害の無い人間だっている。彼らと協力すればきつと環境を良くできる。」

と言う。しかし、太陽は

「できなかつたらどうする。そもそも手助けとは何だ。」

と、認めようしない。

「例えばですが、私や天王星は海や空の環境、土星や木星は土や

木々の環境を良くし、人間たちを手伝うのはいかがでしょう。」

深い青の美しい色の星、海王星がおっとりとした口ぶりで述べる。

海王星が述べた提案には、太陽も少し頭を悩ませた。だが、

「やはりそれでも確証がないだろう。人間が環境に向き合うようになるという確証がな。」

と太陽に賛同していた星々が言うもので、太陽もその言葉に納得してしまった。

その後も議論は白熱し、長時間に渡って会議が行われた。両方、

お互いの意見を受け入れようとはせず、最終的には太陽の決定に従うこととなった。

「では、丁度百年後の今日に人間への警告として隕石を落とすこととする。」

太陽が宣言し、大会議は終わりを迎えた。

さて、この決定を覆すには私たち人間が変化していかなければいけない。地球を壊すのか、それとも守るのか。その判断は今、私たちに委ねられた。



■おた地球さん賞 準大賞

壊しているのは「未来」

藤牧 宗佑

新型コロナウイルスによるロックダウンが解除された頃、ようやく旅行が可能になったので、私は家族で沼津の深海水族館に行ったのを覚えている。深海水族館というだけあって、海底に生きる見たことのないような魚や生き物が沢山展示されていた。水深の浅い場所に棲む色とりどりの魚の展示から、海底に棲むタカアシガニ、更に深い場所に棲むダイオウグソクムシの展示を弟と長い間見続けた。また、弟がクラゲの展示の前からなかなか離れず、次に進みたい私はやきもきした。この時、地球の生き物の多様性とそれぞれが生きる環境による特徴の違いに強い興味をもった。

しかし、一番驚いたのは、二階にあった古代の海に関する展示の補足説明だった。地球上の生き物は、四億四千四百万年前のオルドビス紀末、三億七千四百万年前のデボン紀末、二億五千万年前のペルム紀末、一億九千九百万年前の三疊紀末、六千五百五十年前の白亜紀末に隕石の衝突などで何度も壊滅的な被害を受けているのだ。ペルム紀に発生した世界的な火山噴火の際は、海洋生物の約九十六パーセント、地球上の全生物種の九十パーセントを壊滅させたと言われている。その当時の地球の地上には高さ四十メートルにも到達するシダ類が覆い茂り、様々な種類の昆虫、両生類、爬虫類が生育していたが、そのほとんどが失われたのだ。

私は今まで地球環境に関して考える時間があった時、私達人間が自分たちの破壊から地球を守るというイメージで一杯だった。しかしその展示を見て、地球は五回の生物大絶滅を乗り越えて、青い海と美しい川、多様な生き物が暮らす環境を回復しているということ

を知った。私達人間は地球により生かされ、美しい自然の恵みを受けて生きていく立場にしかすぎないのだ。人間がどんなに地球の環境を破壊しても、きっと地球はまた新しい環境を作り上げていくのだろう。私達が壊しているのは、結局は私達の未来なのだ。

私達は今、海洋汚染や森林伐採、戦争により、地球環境をもすごい勢いで壊している。これ以上破壊を続けられれば地球の環境が壊れてしまうことに気づきながらも、破壊をやめられずにいる。温暖化が進んでいるのにエネルギーの使い方は改善出来ておらず、自然の山々や、森を更に削っては新しいものを作りたがったりする。いつか私達は、隕石も噴火も無かったのに自分達の力で大絶滅してしまった生き物として、未来の生物に記憶されるのだろうか。それは絶対に避けたい。

私の親世代では、地球の破壊は止めることは出来なさそうだが、私が大人になる頃には、地球環境を破壊しないでも生きていける技術や生き方を自分達で生み出せるように、私達が行動していきたい。



■公益財団法人 伊東奨學會賞

みんなの多摩川を大切にしよう

土岐 祐世

ぼくは、学校の近くにある多摩川に初めて行きました。川には一メートル数十センチくらいのテトラポットがありますが、そこを子どもが飛びはねていどうして遊ぶときけんだと思いましたが。このテトラポットは、こう水の水をふせぐためにあるそうなのですが、立ち入り禁止のような看板を立てておかないと、きけんだと思えます。川はにごっているのです、魚はぜんぜん見えません。死がいたらたまに見るのですが、本当にそこで生きているかは分かりません。川にはペトトポトルやビールのかんなどのごみが落ちていて、魚が引っかかることを考えると心配です。川がくさいのは、人がすてたごみやそこに引っかかって死んだ生き物がいるからだと分かりました。

多摩川は色々な理由でくさくなっているけれども、それは人ががんばればどうにかできると思えます。川をもっときれいにすれば、魚もふえてたくさんの方が楽しめるような川になると思えます。ぼくは、多摩川にあるごみになるべくかたづけたいと思います。

多摩川にはどのような魚が生きているのかを調べるために、魚をつかまえることにしました。みんなでわなを数十個作って多摩川に置いたのですが、魚は一ぴきしかつかまりませんでした。話を聞くとわなを作るための形をくふうすればつかまえられることが分かりました。つかまえられるなかったけれども、川にはちゃんと魚がいることが分かって良かったです。

多摩川の水には、色々な物がまぎっているそうです。薬の入ったきかない水や生活で使い終わった水などがまぎっているなんておかしなと思います。けれども、多摩川はきたないわけではありません。じ

つさいに川に行ってみると、そこには植物がたくさんあり、ぼくのそうぞうとはちがいました。ヨシという植物やヨモギが生えていました。ヨシは水をきれいにするだけでなく、魚が生きるのを助けています。ヨシにはノリがついていて、小魚はそれを食べているそうです。また、ヨモギを取っているおばあさんにも会いました。おばあさんは、ヨモギを使ってヨモギモチを作ると言っていました。ぼくは、こんな身近な所でヨモギモチの材料がとれるなんてすごいなと思いました。これからも、こんなすてきな多摩川の自然が続くといいなと思います。

多摩川の自然を守るために大切なことは、ごみをすてないことだけではありません。川には外来種という他の国から来て、まわりのえいようをじぶんだけがとって自然の生たいけいをくずしてしまうものがあります。外来種の植物であれば根っこから引っこぬいてもいいのです。外来種を少しぬくだけで、そのあたりの生たいけいは守られるので、ぬくことも大切です。多摩川にいる生き物はおたがいに助け合って生きてきていると思えます。これからも多摩川のことを学習すれば、人の手で多摩川はきれいになれると思えます。



■公益財団法人大田区文化振興協会賞

◆地球さんご賞本部優秀賞 ふるさと賞

水生昆虫という宝物

吉田 孝太

「水生昆虫を守りたい。」「水生昆虫が身近にいてほしい。」「水生昆虫を知ってほしい。」これが私の願いだ。

私は、多摩川河川敷のすぐそばに住んでいて、小さい頃からいろいろな昆虫にふれてきた。まず興味を持ったのは、陸性のもの。セミから始まり、カブトムシ、クワガタムシ、バッタ、カンタン、カマキリ、コオロギ、トンボ、キリギリス、コガネムシ等々、名前を挙げればきりが無いほどの数だ。そんな中、幼稚園の時のことだ。

河川敷の水たまりで、とつても汚いのに、小さいながらも必死に生きていく、変な生き物を見つけた。それを、ずっとずっと飼ってみたいなど思っていた。何者かわかったのは、図鑑を自分で調べられるようになった、小学生になってからのことだ。これが、私の水生昆虫との出会いである。水たまりにいた変な生き物は、ハイイロゲンゴロウというゲンゴロウの仲間の幼虫であった。母には、気持ち悪いと飼うことを拒まれたが、私にはとてもかっこよく見えた。

この出会いが、今でも、私を水生昆虫の虜にさせている。しかし、ゲンゴロウ、タガメ、タイコウチ、ミズカマキリ、コオイムシといった水生昆虫たちは、田んぼやきれいな川や池に生息するため、田んぼは減りさらに農薬がまかれ、川や池は汚される等の理由で、棲みかを奪われてしまった。水生昆虫は、絶滅危惧種は当たり前という風になり、今や珍しい昆虫となってしまうのである。

でも全くいなくなってしまう訳でもない。ゲンゴロウ類でいえば、東京にもまだ、ハイイロゲンゴロウをはじめ、チビゲンゴロ

ウ、ヒメゲンゴロウ、コシマゲンゴロウといった

種類が見られる。しかし、

コシマゲンゴロウは、かなり限られた所にしか見られない。

私は、中学生になってから、

コシマゲンゴロウの新産地を

探し歩いてきた。守りたいし、

彼らの棲みかを増やし、

棲みやすくしてあげたいからだ。

水たまりを覗いて見て

ください。人間が奪った

自然環境のせいで、小さな

水生昆虫が、水たまりで

必死に生きようとしている

姿に出会えるかもしれません。

そつと覗いて見てください。

守ってあげてください、

小さな宝物を。



■荏原製作所賞

自分以外の全てのために

朝日 奏多

私は海洋汚染について考えた。その主な原因として、特に重要視されているのはマイクロプラスチックだ。最近はその対策として、プラスチックをできる限り使用しないようにしている。私が、私はそれだけに頼ることには反対だ。確かに完全に使用しないようにできるならば解決すると思う。しかし、プラスチックは利便性が高く、優れた素材であり、代替することが難しく、たとえ生分解性プラスチックと呼ばれるものであっても現状では、十分に分解されていないとされている。だから、全てを回収し、再利用することが大切であるので、ポイ捨てをなくすことが必要だと考える。そして、ポイ捨てをなくすためにはポイ捨てをなくすことの大切さを伝えていくことが重要になる。

私は海に行つて遊ぼうとしたときに砂浜にあるごみをいねいに掃除するボランティアの人たちを見たことがある。そのときにあのような人たちが海を守ってきたのだろうと感謝したい気持ちになった。その後、遊び終わってもその人たちは掃除を続けていて、多くの汗をかきながらもかごの中に大量のごみを集めていた。どうして、そこまで海を守ろうとできるのかと思つていたときにボランティアの人にこの海についてどう思うか聞かれた。思つたとおりにきれいだと伝えるとほほえんで、少しでもそう思つてくれる人がいればそれだけで幸せだと言つてくれた。その人とはその後少し話して、帰ろうと少し進んだところで今までに見たことがないものを見た。それはごみが多く詰まった袋が何十枚も重ねられている光景である。このことから、ごみを簡単に捨てられる人が多くいること、

また一方で、この現状を問題視してきれいな海を保つていこうとする人がいることが改めて理解できた。そして、私は後者のような他人のため、海のため、そこにいる生き物のために行動し、問題が起こってしまったなら積極的に解決できるような人になりたいとボランティアの人たちを見て思つた。

このようにプラスチックの使用を少なくする方法以外にも海をきれいにしていこうとする人たちの活動を増やしていくなどの方法が考えられる。ボランティアの人たちの活動を通して、自分の知人やそれ以外の人たちにも海をきれいにすることの大切さ、

現状の海について声掛けをして手伝ってもらえるように熱意をもつてお願いしたい。

そうすることで、今の

地球環境を少しでもより良いものにするように自分が

地球の生き物の一員だという

自覚を持つて、解決に近づいていきたい。



第1回おおた地球さんご賞の優秀賞10作品に贈呈する額入り作品の挿絵を検討させていただいた際に、区内在住で国内外で活躍されている書家・金澤翔子さんの作品を思い浮かべました。

「祈」や「共に生きる」など金澤翔子さんの作品には、おおた地球さんご賞にご応募いただいた児童・生徒の皆様が表現された作品と共通する部分も多くあり、久が原駅に近い『画廊・翔子』の門をたたかせていただきました。

今回、この作品集と額入り作品に、金澤翔子さんの作品を使わせていただくことにご快諾をいただいた次第です。

皆様の作品と金澤翔子さんの書とのコラボは、世界に一つしかありません。

受賞された皆様の貴重な宝物となり、皆さんの作品に描かれている地域や地球環境を守り、慈しみ、目標に向かう時の励みの一つとなれば幸いです。

金澤翔子プロフィール

5歳の時に同じく書家である母泰子に師事し書を始める。

伊勢神宮や東大寺といった名だたる神社仏閣の総本山や大本山にて奉納揮毫や個展を開催。又、愛媛県美術館や福岡県立美術館、上野の森美術館、森アーツセンターギャラリーなど数多くの有名美術館でも個展を開催し成功を収める。

2019年ローマ教皇が38年ぶりに来日した際にはバチカン市国に大作「祈」を寄贈。又、上皇陛下が天皇御在位中に天皇御製を担当し謹書。

近年では、東京オリンピック 公式アートポスター制作のほか、NHK 大河ドラマ「平清盛」の題字担当や、ニューヨーク国連本部での日本代表スピーチなど多岐にわたり活躍。

海外活動は、ニューヨーク、ロンドン、リッチモンド、プラハ、ピルゼン、サンパウロ、サンクトペテルブルク、シンガポールなど世界各地で個展や公演を開催し大きな反響を呼ぶ。

自身の代表作「共に生きる」を合言葉に、災害被災地への応援や障害者支援など、共生社会の実現に向けた活動にも継続的に取り組んでいる。

現在「文部科学省スペシャルサポート大使」のほか、東京タワー初代文化大使など多くのアンバサダーに就任中。

2013年に紺綬褒章を受章。



□ 奨励賞【小学生の部】

美しい海を取りもどす責任

中尾 董

昔の海はごみも少なく、水も透き通るような青色でした。そして、海の生き物も生き生きとしていました。しかし、今の海はどうでしょうか。海洋ごみが増え、美しかった海が消えかけているのです。更に、海の生き物が海洋ごみからまっつてしまったり、誤って海洋ごみを飲み込んでしまったりして海の生き物の数が減ってしまっています。

海洋ごみを増やしてしまつたのは紛れもなく私達人間です。私達は海から魚などの食料資源を多くもらっています。人間がこのまま海洋ごみを増やし続けると、今まであたりまえに食べていた魚などが食べられなくなる恐れがあり、更に、海の生態系が崩れる恐れもあります。

今から約三年前、全国のレジ袋が有料化されました。有料化の理由は、主に海洋汚染です。レジ袋が有料化された事によって消費者の負担は増えたけれど、レジ袋を有料化しなければいけないほど、海を追いつめたのは人間だから自業自得です。日本は他にも、海を守るための取り組みを色々も行っていることから、海はかなり危ない状況であるということがわかります。

では、私達にできる事は何かでしょうか。先程、レジ袋の事を話しましたが、ただ、レジ袋を有料化しただけだと意味がありません。レジ袋の有料化に意味を持たせるにはレジ袋を買わずにエコバッグを使用しなくてははいけません。エコバッグを使用すると、レジ袋が必要ではなくなるのでレジ袋のごみが減ります。他にも、認証マークのある商品なるべく買うようにすることが簡単に実行できます。認証マークとは、商品のクオリティや地球環境への配慮が示されたマークです。環境へ配慮されたものを買うようにすると、限りある資源を未来に残すことができます。

す。

こんな事やっつたって大して海は変わらないと言う人もいるかも知れません。しかし、何千万人も人が美しい海を未来に残すために自分ができることを自分なりに考えて行動すれば、きっと海は大きく変わると私は思います。人間の行動で生まれてしまつた問題は人間でないと解決できません。だから、人間である以上その問題を解決するために、問題を知り、問題について考え、解決するために行動する責任があります。その行動で問題が完全に解決するとは限りませんが、その行動で良い未来に近づく事は確かです。だから私も美しかった海を取りもどすために自分が出来ることを考えて行動しようと思えました。みなさんも海洋汚染の問題を解決するために行動してみませんか。

□ 奨励賞【小学生の部】

プラスチックから海を守る

原 杏奈

私は、社会の学習やニュースで、プラスチックで海が汚染されていることを知り、どうやったら汚染されなくなるか、また、どうやったらプラスチックを削減できるかを考えました。

例えば、海にプラスチックごみがたくさん放出されることで、ウミガメなど、海の生き物たちに大きな被害が出ます。プラスチックの誤食で海の生き物が苦しんでいます。

そこで、海のプラスチックごみを少しでも減らすために、四つの取り組みがあります。

① マイボトルや紙ストローを使ってプラスチックごみを減らす。

② 海や川のごみ拾いボランティアに参加する。

③ 大量の洗剤や油等を排水溝にそのまま流さない。

④ エコラベルのついた商品を購入する。

このように、少しのことでも、ごみを少しづつ減らすことができます。

また、このようなニュースを聞きました。

ヨーロッパでは、レジぶくろの規制が日本よりも早く始まりました。きっかけとなったのが、1991年にイタリアの海岸に打ち上げられたクジラの胃から、50枚ものレジぶくろが見つかったというニュースです。これを機に、それまで無料配布されていたレジぶくろを有料化する動きがヨーロッパで高まったそうです。2018年6月に発表されたUNEP（国連環境計画）の報告書によると、世界の127ヶ国がレジぶくろを法律で規制し、83ヶ国は無料配布を禁止しているそうです。

なので私は、プラスチックの問題等、世界と共通している問題を解決するには、国内だけでなく、世界にも目をむけて考えることが大切だと思いました。

今回私が学んだことは、世界には、まだまだたくさん問題もあるということです。それに、少しでも役に立てるように、たいさく法なども考えたいと思いました。

□ 奨励賞【小学生の部】

多摩川を守るためにできること

柳井 美絃

わたしの家の近くにある多摩川は、どろが多く、ごみがたくさん落ちています。そしてそこにはたくさん生き物がすんでいます。ごみがたくさんあってもいっしょうけんめい生きていました。わたしたないかんきょうでもいっしょうけんめい生きていました。わたしが多摩川で一番好きな生き物は、ハゼです。ハゼは、何種類もいて大きさにも色々なものがあり、うろこがかわいいからです。他にも多摩川には、カメやヘビなどのきけんな生き物もいます。先生は多摩川で、ミシシッピアカミミガメをつかまえてきました。しかし、川にもどすと他の生き物が食べられてしまうので、もう一度川にがしてはいけなと言っていました。多摩川にはたくさん生き物がいることに気づきました。

多摩川には、色々な種類の植物も生えています。ヨシの根には、時々浅草のりがついています。まだ、のりの子孫が残っているからついているそうなので、びっくりしました。

多摩川に行ったら、ヨシをぬいてのりがついていないか見てみたくさん生えているかと、上流からクルミがたくさん流れてくるので、たくさん生えているそうです。カラスは、クルミを上から落としてわれた部分を食べているそうです。クルミはかたそうないメージがあるけれども、本当にわたれるのか気になります。

このような豊かな自然がなくなると、水がよごれ、多摩川がきたなくなる原因になるそうなので、これからは、多摩川の生き物や植物のことをよく考えていきたいです。

今は、多摩川の水がきれいになってきているので生き物がふえてきました。「ヨシ」という植物が水をきれいにしてくれているからです。

一人では、多摩川に行けないので、崎野さんという専門家の人と川のかんさつに行きました。わたしが多摩川に行った時は、しおが引いていました。わなをしかけたら一つのわなにしか魚が入りませんでした。魚は、あまりつかまえられなくて残念だったけれども、また生き物がたくさんはいるわなを作って、学校のビオトープで育ててかんさつしていきたいです。

多摩川では、日々、たくさんの方がプラスチックのごみや使われなくなった電子レンジ、れいぞう庫などをすてているそうです。ごみがたくさんあった場所には、どろがたくさんあっておいが強かったです。でも、自分がすてているごみもあるかもしれないので、へらしていこうと思いました。わたしは、これ以上多摩川をよごさないようにしていきたいです。ごみをすてると、川で生きているカメや魚がえさだと思って食べてしまうので、プラスチックの物をなるべく買わないようにしたり、水とうを持ち歩くようにしたりするなどして、多摩川の自然をこわさないようにしたいです。

□奨励賞【小学生の部】

多摩川をいっしょにきれいにしよう

高橋 薫名

多摩川には、エビ、カニ、魚などの色々な生き物がいる。多摩川には一万種類をこえる生き物があると聞いていたが、わたしが見た時には魚

が少なくなっているように感じた。わたしの知っている多摩川は、何よりにおいがくさい。食品トレーや空きかんなどがすててある。だれかがこっそりとごみをすてたのだろう。

多摩川のしおが引いた時に、少しだけ川に下ろしてもらった。すると、空気のおいが急に小さくなった。ごみが土から出たにおいだった。水がつかっていた石にはティッシュやかびなどがついていて、かびはしょうがない気はするが、ティッシュはだれかがすてた物だと思う。土はグニョグニョで、ベタベタしていた。そのままにしておくとも魚がくっついてしまって動けなくなってしまうかもしれない。そのようにしないためにもごみをすててはいけないのだと思った。

多摩川には、きけんだなど思ったところがある。一つ目は、人が落ちてけがをすることである。しおが引いたときは、川におりられそうだが、テトラポットにのって落ちるとけがをしようかもしれないと感じた。二つ目は、おくに足がはまってしまふ所があることだ。足がはまると動けなくなっておぼれてしまう。だから、気をつけたいと思うし、みんなも気をつけてほしい。三つ目は、水がきたないことだ。色々な人がごみをすてているということは、水を飲むと病気にかかるかのうせいが高い。昔の南六郷では、この水を生活の中で使っていたそうだが、今のわたしたちはこの水を飲んだり使ったりしないようにしたい。このように、多摩川には、色々なきけんがあるのだ。

羽田空港が出来る前のころは、多摩川はきれいだったそうだ。けれども、工場がたくさんできて、けむりやガスが出たり、いらぬ物が流されるようになったりしてきたようになってきたそうだ。

けれども、川の水をきれいにするのをがんばっている植物がいる。ヨシという植物は、水をきれいにすることができるといえる。だから、ヨシがつかないように川をきれいにしていきたい。ヨシの根元には、ノリがついていることもあるそうだ。昔、羽田空港のあったあたりで育てていた

ノリの子どもたちが今も生き残っているようだ。

多摩川をきれいにしていくためには、一人ひとりがごみをすてないことが大切だと思った。ビニールぶくろや紙などを生き物が食べてしまうと、息ができなくなつて死んでしまうというニュースを聞くので、ごみをすてないようにしていくことが大事だと思った。みんなも聞いたことがあると思うので、ごみをすてないようにしてほしい。また、生き物を大切にしてほしい。ヨシのような植物は水をきれいにしてくれる。わたしは川をきれいにするヨシのことをよく思い出すので、みんなも覚えていてほしい。

□奨励賞【小学生の部】

身近な自然を守りたい

米本 凱飛

ぼくは、大田区の洗足池の近くに住んでいます。春にはさくらがたくさんさくので、花見をしに多くの人たちがやってきました。あひるのボートに乗つてさくらを見るのはとても楽しいです。夏には、公園でセミとりをします。夜には公園中でセミの羽化を見ることもできます。一生けん命に羽化をするセミのすがたに感動します。秋には何種類ものドングリを拾います。たくさん落ち葉をパリッパリッとふむのも心地よいです。冬には、池の周りをジョギングします。そこで出会う人たちにあいさつをするのが気持ちよいです。洗足池公園は、自然がゆたかで人がたくさん集まってくるすばらしい公園です。

去年の夏休みの自由研究で、家の周りの水しつ調さをしました。調べた場所は、洗足池と多摩川と千葉県海と雨水です。洗足池の水は、

緑色にごっているので、ぜつ対にきたないと思っていました。が、実さいに調べてみるときれいでおどろきました。後で学校の理科の先生に聞いたところ、植物プランクトンが水の中にいるので、水が緑色に見えるそうです。多摩川のかせんじきには、サッカーでよく行きます。ボラなどの魚がたくさん泳いでいるので、多摩川の水はきれいだろうなと思いつつ調べてみたら、やはりきれいでした。千葉の海にはゴミが落ちていました。コンビニの買い物ぶくろやペットボトルなどです。水はまあまあきれいでしたが、このままどんどんゴミがふえてしまうと心配です。海ガメやクジラや魚などが、プラスチックなどをえさと間ちがえて食べて、死んでしまうという話をよく聞きます。夏休みに行った、国立科学はく物館の海の特別でんでは、クジラの胃の内容物がてんじされていました。そこには、何種類ものあみやビニールひもやなえのポットなど、たくさんプラスチックがありました。一度食べてしまった海洋ゴミは、なかなかはい出されないうです。ぼくは、かわいそうでむねが苦しくなりました。このままでは大切な自然や生物がきえてしまいます。

ぼくは自然を守るために自分ができてることを考えてみました。まずはゴミを拾うこと。周りの人にもよびかけていっしょに拾いたいと思います。ゴミを捨てないで、というポスターをはるのもよいと思います。また、び生物が分かいてけるようなプラスチックもつくつてみたい。地球や身近なすばらしい自然かんきょうを守るために、小さなことでもこつこつとやっけていききたいと思ひます。

□奨励賞【小学生の部】

ゴミがあふれる海

山本 優維

「海を守りたい。」
私はそう思った。

今、私は学校の研究テーマとしてSDGsの十四番「海の豊かさを守ろう」を調べています。そのため、大田区役所でオンラインによる夏休み子ども環境学習教室「プラスチック・紫外線講座」へ参加しました。一見海に関係なさそうな花王さんが、説明をしてくださいました。その中で、海洋ゴミについてのお話がありました。正しく捨てられなかったプラスチックゴミは、風などで飛ばされ、最後には海にたどりつき、世界中の海にすでに一億五千万トンのプラスチックゴミがあるとされていて、毎年八百万トン、スカイツリー二十二基分もの新たなゴミが流れ込んでいると推定されているそうです。私は、とてもビックリしました。

また、私が研究の為に読んだ本の中で、国立科学博物館の研究員でもあり、今年の特別展「海」を監修された一人でもある田島先生のお話がありました。そのお話の中では、ストランディングについて書かれていて、二〇一八年八月五日に由比が浜に絶滅危惧種である、シロナガスクジラが漂着し、調べたところ、母乳を飲んでいる赤ちゃんクジラの胃にビニール片が見つかり、プラスチックゴミが注目されるきっかけとなりました。これは、私が読んだSDGsや海洋プラスチックに関する何冊もの本で取り上げられていました。

そして、今年の一月、大阪市の淀川に迷いこんだオスのマッコウクジラの淀ちゃん、私はニュースで泳いでいる時から見ていました。その後調べた結果、皮下脂肪と筋肉から、人間が出した有害な

化学物質が高濃度でたまっていることが分かったそうです。プランクトンや小魚を食べるうちに毒性が濃縮されていったと考えられるそうです。「海」展でもオウギハクジラの胃に、イカと間違えて食べ、排出されなかった海洋ゴミの写真や、ウミガメの胃の中にあつた海洋ゴミが展示されていました。他に昨年海で回収された一九七〇年頃のアルミ缶もあり、外のアルミは腐食しているものの、中のプラスチック樹脂は残っている状態でした。このままでは、本当に二〇五〇年の海が魚よりもゴミの方が多くなると思い、恐ろしくなりました。

今回オンラインでお話いただいた花王さんは、SDGsの十二番「つくる責任・つかう責任」の製品を作る側としてプラスチック容器の完全リサイクル化を目指しているそうです。私達の身の回りにあるプラスチックはとも多く便利な物ばかりです。全てをすぐになくすことはむずかしいですが、つかう責任として、環境にやさしい商品を選んだり、マイバッグを持参したり、自分で出来ることから始めて、みんなが海を守りたいと思いました。



□奨励賞【中学生の部】

さんご

大村 瑞奈

私が家族と行った宮古島の海は、太陽の光を浴びてキラキラと光り透き通っているだけでなく、たくさんのカラフルで綺麗な魚たちが私たちのすぐそこまで来て優雅に泳いでいました。ウミガメも足の届くところにおいて、人が近づいても逃げも隠れもせずに海底のコケを食べていました。魚たちはやはりさんごの周りに集まり、そしてさんごが大きければ大きいほどそこに集まる魚は多かったです。さんごがあるからこそ綺麗な魚たちがいて、みんなから愛される海があるのだと思います。そんな宮古島の海は、私にとって非現実的な空間で、一生そこにいたい気持ちになりました。そして、その景色は一生残る大切な思い出になりました。

ですが、宮古島から帰ってきてからさんご礁の絶滅が問題視されていることを知りました。気になって詳しく調べてみると、その大きな原因は地球温暖化だそうです。さんごがなくなることは、私たちの暮らしにも大きく関係してきます。さんごは小さな海洋生物の隠れ場になり、それを餌とする大きな魚たちが集まります。また、さんごは藻と共存しており、その藻が二酸化炭素を吸収し酸素を作り出す働きをしています。また、さんごがなくなることによってそれを目当てにした観光客、食卓に並ぶような魚や甲殻類の漁獲量も減少していきます。

このことから、さんご礁の絶滅を防ぐために私たちができることは、地球温暖化を防ぐことだと思います。二酸化炭素の排出量を減らしたり、プラスチックゴミを減らしたりするなどの取り組みで地球温暖化の防止に繋がると思います。具体的には、ゴミのポイ捨

てをしない、マイバッグを持ち歩く、使わない部屋の電気は消すなどを積極的にしていきたいです。これはどこでも誰でも簡単にできることだと思います。小さなことをコツコツと積み重ねていくことで、貢献できるのではないかと思います。これらの活動をするのでさんごの絶滅防止だけではなく、様々な環境問題を防ぐことができると思います。

私は宮古島に行った時、波打ち際にお菓子のゴミが落ちているのを見つけたのですが、自分が楽しみたいという欲に負けてしまいそのゴミを見て見ぬふりをしてしまいました。今後このようなことがないように、見つけたゴミはできるだけ拾えるようにしたいです。

ゴミのポイ捨てがなくなり、地球温暖化を防止することで、さんごや魚たち、植物たちが美しく生息し続けることができる世界になったらいいなと思いました。

□奨励賞【中学生の部】

大田区と地球環境

村上 遼真

大田区はいい街です。交通の便もよく、自然も豊かで、商店街が都内最多という地域の関わりも深い場所です。また、銭湯も都内最多で、黒湯という肌をきれいにする効果のある温泉もあります。僕は、そんな大田区のすごいと思うことと、直していききたい環境問題について考えました。さらに、大田区だけでない地球規模の環境問題についても考えました。

まず、大田区のすごいと思うことは、ふるさとの浜辺公園や、洗

足池、区立図書館などの公共の施設が清潔に管理されていることや、桜のpromナードや洗足流れなどがしつかり整備されていて、歩きやすく、心地よいことです。今回の課題を考えることを通じて、大田区が住みやすい理由はここにあると改めて感じました。

そして、直したいと思ったことは、東京湾や呑川が汚いことです。汚くなる原因には生活排水も含まれていることを大田区のホームページで知りました。料理などで使った油や、食品のカスなどが川や海に流れていることも原因の一つです。

そのような生活排水を少しでも減らせるように、油は使う量だけ出したり、食べられるものはなるべく食べ切るようにしたいです。

地球環境では、プラスチックのゴミなどが海洋に流れ出ること、海洋プラスチックゴミとしてそれを海の生物が餌と間違えて食べてしまうことがあります。それを食べた魚を人間が食べてしまい、人体にも影響を及ぼす可能性があります。ゴミのポイ捨てによって多くの生物や人間の命に危険を及ぼすことがわかりました。

また、地球温暖化が進む中で、少しでも気温上昇を止められる方法は無いか考えました。

例えば、二酸化炭素の排出量を減らすために、家のエアコンの温度をなるべく高くしたり、使わない部屋の電気を消したり、冷蔵庫の開閉の回数を減らしたりして電気の消費を減らすようにすることです。他にも、不要なもので、まだ使えるものはなるべく捨てずに、修理したり、売ったり、資源としてリサイクルしたりして、ゴミを減らせるようにしたいです。

このようなことから、大田区のしつかりとした設備を何気なく使っていることに感謝して、みんなで済みやすい地域を保っていききたいと思いました。

環境問題については、一人ひとりの二酸化炭素の排出や生活排水

の量は少なくても、その積み重ねによって、川や海が汚れたり、気温が高くなったりしているんだということを知りました。環境問題は、他人事ではないということ意識して、少しでも貢献できるようにしたいです。

□奨励賞【中学生の部】

本当は身近な水不足問題

中山 柚乃

私が調べたのは、「水不足」についてです。これについて調べたきっかけは、日本が水に恵まれている国だと思ったことです。

日本には室内外問わず、いたるところに水道があります。そして、それらのほぼ全てが飲むことのできるきれいな水を出しています。

そんな豊かな水に囲まれた日本に住む私は世界的な問題とされている「水不足」をどこか遠い存在のように感じていました。

しかし、水不足に苦しんでいる人は多くおり、その割合は世界の約5%にあたるというのが現状です。私は、その現実から目を背け、テレビや新聞を通してのみそれを思い出す傍観者になることを恐ろしく思いました。

そして、「無知は罪なり」から始まるソクラテスの言葉を胸に掲げ、その言葉に押されるようにして、私はこの問題について調べ始めました。

水不足を引き起こしている原因はいくつかありますが、その中でも印象に残ったものを二つ紹介します。

一つ目の原因は、人口増化です。近年、地球温暖化により世界の各地で大規模な干ばつが起きています。こうして使用できる水の量が減少している一方、地球における人口はかつてないスピードで増化し続けています。そのため、必要な水の量に対しての供給が追いつかず、水不足になっていっているのです。

二つ目の原因は、水質汚染です。

水質汚染を引き起こす大きな要因の一つとして、「生活排水」が挙げられます。生活排水とは、台所やトイレ、お風呂等日常生活で使った水のことです。この水を川や海に流すとプランクトンが異常増殖し、赤潮や苦潮を発生させてしまいます。赤潮や苦潮は水を汚染し、飲み水を減らすことだけでなく、アサリなどの魚介類の減少にもつながります。

しかし、その生活排水などの処理や水の再利用への取り組みはあまり進んでいません。それを証するように、現在地球上の生活排水のうち約80%が未処理のまま海や川に放流されています。

これに対して私たちが家庭でもできる取り組みがあります。それは、「食べ残し、飲み残しをそのまま流さない」ということです。みそ汁や牛乳、油などは水を汚しやすく、魚が住める水質に薄めるには浴槽の水が四く十六杯必要になる程です。そのため、食べ残し、飲み残しをしないようにすることや、皿に残った油やソースは拭き取り、水道に流さないようにすることが大切です。

今回水不足について調べたことで、私の環境問題への関心の薄さを痛感しました。調べたことのどれもが初めて知ることだったからです。

水不足の原因である水質汚染は、私たちの些細な行動で改善していくことができます。だからこそ、身の周りの環境に関心を持ち、日々の生活を改めていきたいと思いました。

□奨励賞【中学生の部】

変わる空気

島 一斗

小学三年生のときに、親の転勤で僕は今まで住んでいた川崎から二年間フランスへ行くことになった。フランスへ行く前の日本は七月の中旬からセミが鳴き始めて、暑くなるのも今より遅かった。さらに、ゲリラ豪雨というものもなかった。それがフランスから帰ってきてどうなったか。セミは七月の中旬から鳴いている。六月下旬から暑い。ゲリラ豪雨もある。その理由としては、帰ってきた場所が前住んでいた場所と違うというのもあるかもしれない。しかし、僕が前住んでいたのは川を挟んで対岸側だ。大田区の目の前である。さらに、環境もそこまで変わらない。つまり、気温や天気はあまり変わらない。それなのに僕が二年前にいたときと違うのだ。それはつまり、僕が日本にいない二年間で地球温暖化により、変化したということだ。フランスは二年前初めて行ったし、二回ずつしか四季を経験していないので変化したかどうかは分からないが、日本には八年間住んでいたのだから。

初めてゲリラ豪雨を体験したのは小学五年生の五月だった。クラブでサッカーをしていて、練習が終わった後、コーチからゲリラ豪雨の予報が出ているから早めに帰れと言われ、僕はゲリラ豪雨など日本で起こらないものだと思っていたので少し驚いたのを覚えていた。その他にもセミは二年前より早く鳴いているし、暑くなるのも早くなっているのにも驚いた。

実は僕は今もう中学三年生になっていて、日本に帰ってきてから五年たつのだが、毎年温度が上がっていき、暑くなるのも速くなっていると感じている。例えば、僕が帰ってきた二〇一九年七月の平

均気温は二七・五度、最高でも三四・六度だ。それに対して今年の七月の平均気温は三三・二度、最高三七・五度だ。これを見て分かる通り、年々暑くなり、暑くなるのが早まっている。さらに、僕は今年の六月二十九日にセミの鳴き声を聞いた。これも、暑くなるのが早まっている証拠と言えるだろう。また、この傾向も年々高くなっている気がする。

気候変動。それは僕たちが一番身近に感じやすい問題で、一番体に影響が出やすい問題の一つだと思う。そして、一番色々なSDGsに関係する問題だと思う。気候変動を解決するということは多くの問題を解決することであり、また、一番難しく時間がかかる問題だ。しかし、このまま放置するのではなく対策をして、解決できるように近い未来を担うもの一人として、考えて生きていかなければならないと思う。そして、一つずつ問題を確実に解決しなければならぬ。

□奨励賞【中学生の部】

地球を守るはじめの一步

浅島 花香

私は文房具が大好きだ。だから新作のシャーペンやボールペンを見つけるとついつい買ってしまふ。お母さんに「まだ買い替える必要がないのにもつたいない。」とよく言われる。たしかに使わなかったものは机の奥にしまっていた。「でも捨てているわけではないし…」と自分を説得させるようにいつも思っていた。

ある日、環境問題を取り上げた番組がテレビでついていた。なんとなく見ていたが、そのゴミの量に驚いた。美しい砂浜が一面ゴミ

で覆い尽くされていたからだ。今まで授業の中で調べたり、写真を見ていたりしたが「近くに海なんてないから…」と、どこか他人事のように思っていたからテレビを見て驚いてしまったのかもしれない。最後に言っていた「ひとりの小さな行動が海を救う」という言葉とモヤモヤした思いが心に残った。

またある日私は文房具店へ行き、新作を探しているとある商品に目が止まった。それは海から回収されたプラスチックを使って作られたボールペン。と同時に、「ひとりの小さな行動が海を救う」という言葉を思い出した。私は思い切ってそのボールペンを買ってみた。そして、レジの近くにある使用済みのボールペンを回収する箱が設置されていることにも気がついた。今まで机の奥にしまっていたボールペンをその箱の中に入れてみると、心の中はずっとあるモヤモヤがスッと晴れた。このモヤモヤは行動を起こさない自分以後悔していたからあったのかもしれない。

この出来事を振り返ると、テレビをきっかけに「プラスチック問題」や「自然」、「SDGs」を知って関心を少しずつ持つてくるようになったから買ったあのボールペンや回収箱の存在に気がつくことが出来たのだと思う。「自然に優しいボールペンを買う」「何本カリサイクルする」という行動はたしかに小さな行動だが、「塵も積もれば山となる」という言葉があるように、小さな行動がいつかは大きな力になるはずだと信じてこれからも自然に貢献していきたい。

世界に目を向けると海、湖、森などあらゆるところで環境汚染が進んでいる。環境問題を解決するためにもまずは「知ること」が重要だと思う。世界で起こっている出来事に対してしっかりと受け止め、今の自分に何ができるのか考えていくことが地球を守る第一歩になると思いませんか。

□奨励賞【中学生の部】

僕にとつての当たり前。

君にとつての当たり前？

檜作 優斗

「今、安全な水を手に入れられない人は、世界で六億六千三百万人にのびります。」

ある日ニュースで、この言葉と共に必死の思いで泥水を集めようとする女の子の映像が映し出され、強い衝撃を受けた。僕は当たり前のように、きれいで澄んだ水を使っている。実際、日本では「飲み水に困る」ことがあまりなく、一日に一人あたり、約三百リットル近くの水が使われているそう。一方、世界では水不足が深刻化し、当たり前前に清潔な水が確保できない地域が少なくない。その中で「やっとの思いで手に入れた水が命を奪う水」という悲惨な現状にあることを知った。そして、僕達一人一人、少しでも貢献できることはないかと思ひ、調べてみた。

調べてみると、大切なことは大きく三つあると感じた。一つ目は「節水」だ。当然かと思うが、やはり水の無駄遣いを減らすことが大切だと思った。例えば、食器はためすぎにするだけで一か月、約三千六百リットルの節水になる。他にも、水をこまめに止めたり、お風呂の残り湯を活用したりすることで貢献することができる。二つ目は「募金」だ。「きれいな水があれば、変えられる。」を掲げ、子どもたちの命と未来を守るユニセフの水支援への募金が例として挙げられる。昨年一年間だけでも千三百六十万人に緊急給水を行ったというデータも出ている。僕達の募金によって多くの命、未来を守るべきだと感じた。三つ目は「現状を知ること」だ。そもそも水不足の重大さを知らなかったり、何をすべきか分からなかったりする人が多いと元も子もない。特に、SDGs目標六「安全な水とトイレを世界中に」に関する取り組みを調べたり、情報発信を行うSNSアカウントをフォローしたりと「知る」には様々な手段がある。「知る」ことによって、視野を広げ、僕達の行動の選択肢を増やすことができると思った。

このように、世界の悲惨な現状を受け、僕達一人一人ができることを心がけて生活していくことで、少しでも、問題解決に貢献することができると思う。また、世界が抱えている問題は「水不足」だけではない。そういった問題に向き合う上で、僕は「当たり前を疑う姿勢」が大切だと思う。「きれいな水を思う存分使える」それが当たり前でないように、「自分にとつて当たり前なことが他の人にとつて当たり前でない」ことがある。例えば、「教育を受けること」や「衣食住が充実していること」など、様々ある。世界中で起きているこのような問題を、「当たり前を疑う」ことで知り、考えて、行動に移していけるかが、これからの問題解決、改善において大切だと思う。

□奨励賞【中学生の部】

光る海

福島 一穂

私が初めて見た海は、宝石のようでした。遠くから見ると色とりどりのお魚が生き生きと泳ぎ、太陽の光に反射されながらますます翠玉の如く輝いている光景に圧倒されました。お魚たちは何の縛りもなく、ただエメラルドグリーンに光る海の中で泳ぎ続けていまし

た。私は当時その魚たちを羨ましく思っていました。私も柔らかな光に当たりながら、煌めく海の中で自由に泳ぎたいなと……。

それから十年後、私は件の海にもう一度行ってみることにしました。もう一度あの輝かしい海を見たい気持ちに駆られたからです。私の心の中にはあの海は美々しいだろうという確信がありました。しかしそこにはとんでもない光景が広がっていました。砂浜には太陽の光に照らされてキラキラと白く光るモノが存在しているではありませんか。遠くからだどキレイなモノにしか見えません。何だろうと思つて近づいて見ると、私の嫌な予感的中しました。そのキラキラと光るモノはプラスチックです。砂浜には大量のキラキラとしたプラスチックが溢れ、それらのほとんどがとても細かいのです。手にとってみると三ミリ以下のものから、ペットボトルやビニール袋など原型をとどめたモノまでありました。さらにそれらが徐々に海に流されていくのです。とても残酷な光景でした。こんな状況なのにプラスチックのゴミを回収する人は、私以外誰一人もいませんでした。

ありとあらゆる人々は、この状況を見て見ぬ振りをして自分には関係ないと思つているのではないのでしょうか。プラスチックゴミを減らすためには、そういった人々の意識を変える事が必要だと思います。そのためには、まず自分達にできることを全力で行うことが必須なのではないでしょうか。例えばプラスチックの使用量を減らすために3Rを心がけたり落ちていくゴミを見つけたら拾ったりすることです。これはとても当たり前のことです。しかし、なんでもないような当たり前のことを徹底的に行うことで、人々の意識の变化につながり海洋プラスチック問題の糸口になると思つています。世界では今このようなプラスチック問題が起きています。その問

題を発生させたのは我々人類であり、それに責任を持つて立ち向かうのも我々人類です。プラスチックによって光る海は決して美しいモノではありません。そんな醜い海は私達が望んでいるモノではありません。プラスチックによって光る海ではなく、透明で翠玉のように光る海を望んでいます。私達にとって海は生命が誕生した場所であり、生命の源の象徴でした。人類によって生命の源が破壊されようとしています。私達はこの問題に責任を持つて立ち向かい、一人一人の意識を変えなければならぬのではないのでしょうか。

□奨励賞【中学生の部】

◇地球さんご賞本部 奨励賞

小さな意識の積み重ね

後藤 結衣

「多摩川はあばれ川だった」との資料をみつけ、信じられなかった。多摩川は小さい頃から兄の野球の練習や試合を見に行ったり、ソリや段ボールを持つて土手を滑つて遊んだりした思い出深い場所である。私知知っている多摩川と「あばれ川」という言葉は中々結びつかなかった。

多摩川は古くから何度も大雨や台風による大洪水を起こし、地域にかなりの水害をもたらしていた。多摩川は江戸時代から農業用水や生活用水として大切な川であるが、同時に地域住民を水害から守る必要があった。そのため自然環境に配慮しながら景観保全を行う護岸建設に長い年月が費やされた。おかげで、多摩川は「あばれ川」から私知知っている穏やかで落ち着いた川になっていた。

数年前、青梅市の多摩川上流で家族とラフティングをした。緑に囲まれ大きな岩の間を流れる川の速さと激しさ、そして冷たさは、私が見慣れた下流の川とは全く違った。それと同時に、奥多摩のさらに奥の上流から東京湾まで流れる多摩川の長さを実感し皆で川の大切さを再認識した。ラフティングの後、透き通る川の中でニジマス釣りをする機会があったが、多摩川は「あばれ川」という別名に加えて「死の川」と呼ばれるほど汚染されていた時期があったことを係の人が教えてくれた。高度成長期の産業と人口の集中により工場排水と生活排水が増え多摩川は汚染されていたそうだった。その後、長い期間をかけた下水道普及、排水規制などいくつもの対策で多摩川はよみがえった。大規模な対策に加えて近隣住民や有志の方々は魚が生息できる川を目指した。調べてみると川底の苔は鮎のエサとなり、水をきれいにしている効果があった。鮎が苔を食べることで、次々に新しい苔が育ち浄化が進むという好循環があると分かった。緑の美しい苔により、鮎が生息できる環境へと水質が改善された。「あばれ川」「死の川」は川と共存する人の意識と行動で更に改善された。人間の意識と小さな積み重ねが対策となり、大きな効果をもたらすことはたくさんある。私の通う中学では、近くの洗足池の自然を守るために毎週、清掃活動を行っている。落ち葉掃きや吸い殻拾いを続けることで、環境の改善を目指している。また、毎年放流したホタルの幼虫が、七月末ごろに羽化し、美しい光を放っている。人間の意識により自然は浄化して、人に安らぎを与えるというサイクルをもたらしてくれる。特にこのコロナ禍では自然が人に与えた影響は大きかったと思う。そのため、これからは今まで以上に身近な自然と共存していきたい。私たちが生活用水に気を遣ったり、ゴミを減らしたりするだけでも川へは良い作用をもたらすと思う。小さな意識を積み上げて、近くの多摩川で鮎の遡上を、洗足池ではホタルの光を見られることを願いたい。

□奨励賞【中学生の部】

◇地球さんご賞本部 奨励賞

ひとりぼっち

A. F

あるところに
年老いた ひとりぼっちの
ライオンがいました
そのライオンは 大きく 強いので
仲間たちから尊敬されていました
そのライオンは かしこいので
動物の心を 悟ることができました
人間の心も 同じでした
そのライオンは
たくさんの家族と暮らしていました
でも 今は ひとりぼっち
森は 枯れ 焼かれ
太陽が 大地を裂き
川は消え 海は汚れ 山は崩れ
代わりに目につくものは
人間の都市からやってくる
ごみの山
獲物は死に絶え 仲間も死に
家族も子どもたちも死に
よく体を休めていた大木も
死んでいました
ひとりぼっちのライオンは 飢え

飲む水もなく あてもなく
焼けた森を 裂けた大地を
さまよっていました
あるところに
若い ひとりぼっちの
少年がいました
その少年は 心が豊かなので
自然の心を悟ることができました
動物の心も 同じでした
その少年は 母と 兄弟と
少しの友達と 暮らしていました
よく 兄弟や友達と
森や 川で 遊んでいました
でも 今は ひとりぼっち
森は 枯れ 焼かれ
太陽が 大地を裂き
川は消え 海は汚れ 山は崩れ
代わりに目につくものは
都会からやってくる
ごみの山
家畜は死に絶え 友達も死に
母も兄弟も 死にました
ひとりぼっちの少年は 飢え
飲む水もなく あてもなく
焼けた森を 裂けた大地を
さまよっていました
あるとき

少年は 人に 声をかけられました
都会の 密猟者のようでした
少年は 何か仕留めたら金をやる
と言われ ライフルを渡されました
その日の夕方
ひとりぼっちの少年は
ひとりぼっちのライオンに
出会いました
飢えた少年は お金がほしいのです
ライオンにライフルを向けました
ライオンは 少年の心を悟りました
少年も ライオンの心を悟りました
ライオンも 少年も
お互いを傷つけないのです
少年は 目に涙を ためていました
あなたがライオンだったら
身を守るため 少年を殺しますか
あなたが少年だったら
ライフルの引き金を 引きますか
あなたが何かを買うことで
少年やライオンが傷つくとしても
あなたはそれを 買い続けますか
あなたがさつき捨てたごみが
森を焼き 裂けた大地に積まれても
あなたは 捨て続けますか

□奨励賞【中学生の部】

海

小山 貴子

最近の地球は暑すぎる。これからお出かけをするんだと楽しい気持ちで支度をして、玄関の扉を開けて感じる熱気に少し気分が下がってしまう。猛暑に奪われた私の楽しみは、これだけではない。

私の家では、毎年お盆休みに田舎のおばあちゃんの家へ帰省し、親戚たちと一緒に近くの海に行くのが恒例になっている。朝早くから家を出て、海の家へ近く割と涼しい場所にレジャーシートを広げて場所取りをする。それからきれいな海を泳ぐのはもちろん、砂浜でビーチバレーやビーチフラッグをしたり、年下のいとこと砂のお城を建てたり、お昼にはBBQでお肉を焼いたりして夕方までのんびり海で過ごす。これが私の夏休みを代表する思い出になっていた。しかし、ここ二三年、思い出の海には行けていない。その理由は、この暑さだ。最後に海を訪れた年に、当時十歳のいとこが熱中症で倒れてしまったのだ。それから両親たちは、この暑さは危険だと判断し、毎年楽しみだった海に行く恒例行事はあっさり中止になってしまった。とても残念だった。自分が幼い頃から遊んでいた海だったからこそ、とても残念だった。そんな私の姿を見たおばあちゃんが、それでは可哀想だと私たちを海の代わりに室内プールに連れて行ってくれた。だが、私はあまり楽しむことができなかった。もちろん、プールで泳ぐことも楽しかったが、やはり海には自然ならではの楽しさがある。おばあちゃんの家へ帰宅してから私は、おばあちゃんに、

「もう海には行けないの？」

と聞いた。するとおばあちゃんは、

「最近の夏は、本当に暑いからね。私が子供の頃は、もともとずっと涼しかったんだけどね。やっぱり、地球温暖化の影響だね。まあ、また涼しくなってから行けばいいじゃないの。」

と答えた。その頃、地球温暖化という言葉はあまり人々に知られておらず、私も知らない言葉だった。今思うと、当時の人々の問題意識はとても低いものだったと思う。最近では、聞かない日はないという言葉だからだ。そしておばあちゃんは、涼しくなってから行けばいいと言ってくれたが、本当に涼しくなる日が来るのだろうか。毎年夏の平均気温は上がり続ける一方だ。このまま温暖化が進めば、将来自分の子供は夏の海の楽しさを知ることができないのではないかと少し悲しくなる。そうなる前に、私はどうにかしたい。

私一人にできることは、こまめに節電をするなど本当に小さなことしかない。私一人が行ったところで、ほとんど効果はないだろう。だからこそ私は、親戚や友達など周りの人に呼びかけを行いなから一緒に対策をしていきたい。一人では小さな力でも、みんなでやれば大きな力になると信じている。そして、私の思い出の海が返ってくることを信じている。

□奨励賞【中学生の部】

洗足池の未来

三浦 悠太

私は去年の十月から学校の部活動で学校の近くにある、洗足池という池の水質浄化を行うため、数々の実験を行ってきました。そして、実験の中で水質浄化を行うことの意味やそれを通してどのよう

なことが起こるかということに気がつきました。

まず、水質浄化を行う意味として第一に挙げられるのは人や他の生物が生きやすい環境を作ることですが、ここで注目したいのは、どのようなして水質浄化を行うかということです。私は微生物を使った水質浄化をしていますが、池や湖、海などには生態系があり考えなしに微生物を放流してしまうと、生態系が崩れ、かえって水質の悪化につながってしまうこともあります。また、水質浄化を行う過程においても注意点がおり、例としては電気を使う場合、電気を作るためのエネルギーによっては環境に悪い影響を与えてしまいます。このように、水質浄化を行う際にはそれが本当に水質浄化を行うことができるかということ、水質浄化の実験によって、他の環境に対して悪い影響を与えないかということ意識することが大切だと思います。

次に水質浄化を通して、どのようなことが起こるかについてです。水質浄化によって、池や湖、海などの環境の改善を行うことができますが、それだけでは完全に環境の改善を行うことができません。例として、現在海などにはマイクロプラスチックなどの有害なごみが捨てられています。海などの水を水質浄化によって綺麗にしたとしても、マイクロプラスチックなどによって生態系が崩れることから、接続性があるとは言えません。よって水質浄化とは海などにごみを捨てないようにする、などの個人の行動そのものであるとも言えます。また、地球温暖化によって、海などの水温が上がることによって引き起こされる、生態系の崩壊も水質汚染や海洋汚染の原因になっていきますが、これも個人の行動が解決に向かうと思います。また、一人が行動したところで何も変わらない、と言っている人もいますが、会社などの組織が行っていることも、もとは誰かが提案したことで始まったことなので、組織で何かを行

うにしても個人の行動が大切だと思います。

環境問題の解決は決して簡単なことではありません。しかし、このまま進行すれば今よりも解決が難しくなると思います。当機立断という言葉のように、まだ解決することができると可能性がある今こそ、すぐ行動するべきだと思います。

□奨励賞【中学生の部】

海を守るために

遠藤 彩加

地球の表面の七割を占める海は、私達にとっても重要な役割を果たしている。海は太陽により温められ、温められた海水が地球を循環する。これは太陽からの熱エネルギーを地球全体に広げる役割を果たしていることになる。また、二酸化炭素を吸収して地球温暖化を抑制する働きもしている。もし海がなくなると、海の生物やそれを捕食していた動物はいなくなり、雨が降らなくなるため地上は干ばつに見舞われる。それにより、作物も育たないため食料不足や、水不足に陥る。また、昼夜や夏冬の寒暖差が激しくなるため、生物が生きられない環境になることは明らかだ。ここから、海は地球に住む全ての生物にとってなくてはならない存在だといえる。しかし、現在の海は様々な問題を抱えている。

一つは海洋汚染である。海洋汚染の原因の大半は海洋ごみによる汚染で、特にプラスチックごみは深刻な問題である。加えて、これらを引き起こしたのは人の日々の暮らしによるものばかりである。海洋汚染による影響は様々な所に現れているが、その中でも海洋生

物やその周辺で生きる生物の減少は重大な問題だ。彼らの多くが海洋汚染によって住みづらい環境になり、ごみや化学物質を飲み込んで死んでしまう生物も多い。また、産卵場所が汚染されることによってその数を減らす原因にもなっている。すると、生態系バランスが崩れ、私達がこれまで獲ってきた魚介類の数も減ってしまうだろう。それにより私達が食べられる魚介類の数が減るだけでなく、漁業者も減ってしまうのだ。このように、海洋汚染によって様々な問題が重なり、負の連鎖が生じてしまうのである。この問題を解決するため、海岸や河川のゴミ拾いや、買い物時のエコバッグの持参、マイボトル・マイ箸の使用、エコラベルがついている商品を買うなどの対策が挙げられる。エコラベルとは、持続可能で環境に配慮した漁獲、あるいは養殖された水産物であることを表したマークである。これらが貼られている商品を購入することで、適切な方法で漁業を行う人々が潤い、より多くの漁業者がエコラベルの認定を受けた適切な漁業を行うことになる。これにより、海洋環境を守る手助けとなるのだ。他にも、海が抱える問題は、乱獲による水産資源の枯渇や外来種による生態系バランスの悪化、気候変動によるサンゴの白化なども挙げられる。

先述したように、海は水産資源を確保できるだけでなく、私達が地球に住むことができる環境を作っているともいえる。海洋汚染などの問題を解決するためには、私達一人一人が意識して今までの生活を改め、行動していく必要があるのだと感じた。また、今回この作文を書くに当たって、これらの問題の深刻な現状を知る良い機会になったと思う。まずはこれらの問題について知ることから、そしてそれによって一人一人の意識を改善するきっかけにしていきたいことが大切なのだと考えた。

□奨励賞【中学生の部】

白いサンゴと地球温暖化

川田 あさひ

私は夏休みに行った沖縄でサンゴの白化を目の当たりして、とても悲しい気持ちになりました。なぜなら私が想像していたサンゴの状態と違ったからです。最近ではニュースなどで白化現象について取り上げられることが多く、危険な状態であることは知っていました。が、どのくらいなのかは分かっていませんでした。いざ、沖縄の海に泳いでみると、白が多く、衝撃を受けました。

そこでサンゴの白化について調べました。地球環境研究センターによると、サンゴの白化は環境ストレスにより、サンゴに共生している褐虫藻という植物の光合成系が損傷されてサンゴが褐虫藻を失うことで起こるそうです。環境が回復すれば、褐虫藻を再び獲得してサンゴは健全な状態に戻りますが、白化が長く続くとサンゴは死んでしまいます。またサンゴについて調べていくと、サンゴ礁は藻類など小さな生物にすみかやエサを与えていて、そこには、それらの生物をエサとする魚やエビなどが集まるため、サンゴ礁は生物多様性にとつて、非常に重要な場所であることがわかりました。もしもサンゴが死んでしまったら、サンゴ礁をすみかにする生物だけでなく、その生物を食べる生物も姿を消し、生態系バランスが崩れてしまうことが予想できます。更に、沖縄などといった観光地にとつて、綺麗なサンゴは観光の対象として大切です。

そんな大切なサンゴが失われている悲しい現実がありますが、まだ手遅れではないと思います。白化状態は環境が回復すれば、元のサンゴに戻る。なら、私たちの取り組み次第でサンゴを元に戻せる、ということですね。褐虫藻がサンゴを離れる原因は地球温暖化に

よる海水温上昇などです。私たちにできる対策を考えてみました。

一、省エネを心がける。私が通う中学校では、エアコンの設定温度を上げるために、グリーンカーテンの設置を行っています。二、節水を意識する。安全な水を各家庭に届けるまでに、多大なエネルギーが使われているので、そのエネルギーを無駄にしないようにする必要があります。三、海に入るときの日焼け止めは天然由来成分にする。日焼け止めの化学物質はウイルスの繁殖を促し、サンゴの白化や死を招く恐れがあります。四、ポイ捨てをしない。サンゴや海の生物がマイクロプラスチックを食べると、栄養失調や消化管閉塞を起こす可能性が高いです。

今回私は、サンゴを通じて様々な問題に直面すると共に、サンゴの重要性についてよく知れました。地球温暖化は様々な問題に大きく関係しているため、大きすぎる問題だと思ってしまうがちですが、小さな行動でも多くの人がコツコツと行動することで、様々な問題に効果を示すことができると思います。きれいな自然と地球を守るために、私たちは行動していきます。

□奨励賞【中学生の部】

海に捨てられたゴミ

山本 楓

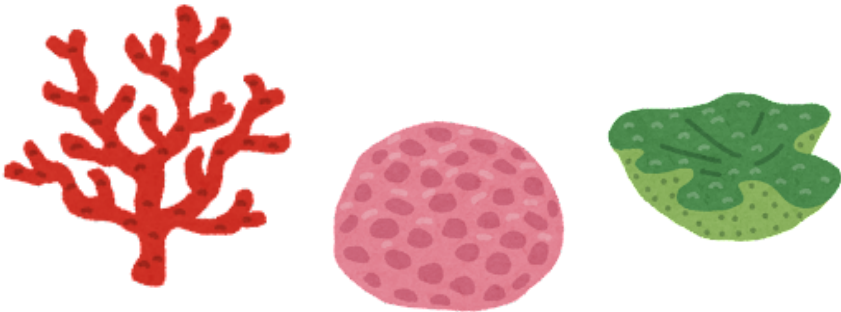
現在世界では、地球温暖化や海洋汚染、大気汚染など様々な環境問題が注目されている。その中で私は海に捨てられたゴミを実際に見て、このままではまずいのではないかと思った経験がある。

私は以前、家族と釣りへ行ったことがある。岩場の石にのり、竿

を海の中に入れると、魚を釣ることができ、周りにもたくさん釣りに来ている人がいた。大きい魚はなかなかいなかったが、小さな魚ならどんどん釣ることができてとても楽しかった。しばらく魚を釣っていたが、少し戻って休憩しようと思い、岩場を歩いていたら、ビニール袋やお菓子の袋など、小さなゴミがいくつか落ちていたのを見つけた。中には、ゴミが海のぎりぎりに捨てられていて、流されそうになっているところを急いで拾いに行っている人もいた。その人は自分が捨てたわけでもないのにそのゴミを回収し、持ち帰っていた。よく見てみると、海に流されてしまっているゴミもあった。普通に考えれば、このような多くの人が集まる場所にゴミを捨てても良い訳がないし、海に流されたゴミを間違えて魚が飲み込んでしまったら、とても危険だ。日頃からこのようなことも多いのか「ゴミは持ち帰ろう」と呼びかける看板もあった。看板まで置いてあっても、ゴミを勝手に捨てていく人が後をたたないのはとても深刻な問題なのではないかと考えた。海は人間にとっても、海に生息する生き物にとっても生きていく上でとても大切な場所だ。しかしこのままでは、そんな海が生き物の命をうばってしまう場所となってしまうかもしれない。そうならないためには、何か行動を起こさなければならぬと思う。

海が汚れてしまうのは、ゴミを捨てている人がいるからだ。いくらかゴミを拾っても、捨ててしまう人がいては、永遠にきれいにすることはできない。ゴミを捨てられることがなくなり、その上でゴミを拾うという状況にならなければ問題解決にはつながらないと思う。そのためには、一人でも多くの人に海が現在どのような状態か、このままではどうなってしまうのか、そして何をやめて何をやらなければならないのかということを知ってもらう必要があると考えた。私は、中学校でSDGsについて学ぶ機会がたくさんあり、

環境問題についての話もきいてきた。地球の環境を守っていくためにはどうすれば良いのか話し合ったり、調べたり、自分で考えることで、環境問題について知る前よりも、圧倒的に何を行ってはいけ
ないのか、何をするべきなのか考えて行動するようにになった。私は
学校で学ぶことができるが、なかなか環境問題について学ぶ機会
のない人もいると思う。このような人たちにも知ってもらおう場
面を作ることが、海を守るための大きな一歩につながるはずだ。これ以上
生き物のすみかをうばってしまわないよう、一人でも多くの人が意
識して過ごしていけるようになって欲しい。



■実行委員会特別賞

みんなのたまがわ

立花 佳奈

たまがわは きれいです。
ですが、たまがわを よごす わるいひと たちも います。
そんなことを すると きれいな、たまがわが かわいそうに なって
しまいます。

ですから みんなで きれいな たまがわを つくっていくのも、いい
とおもいます。

たまがわは どてに あります。
どてにきて たまがわで あそんでいるこも、みまもっているおとなも、
たまがわもしあわせで うれしいのですが、たまがわが よごれている
ときかなが くらせなくなってしまうます。

たまがわを きれいにしして、さかな にんげんどうぶつを よろこばせ
てあげたいです。

ですからそのためには、みんなで かんきょうを やさしくし、ひとと
ひとを つながらせて、たまがわを たすけてあげて せかいを すく
ってあげて たまがわを きれいに するのです。



「地球さんご賞」 大田区実行委員会 名簿

1	白鳥 信也 【監事】	公益財団法人大田区文化振興協会 事務局長
2	菅野 哲郎 【会長】	大森第六中学校 校長
3	小山 文大【副会長】	大森海苔のふるさと館 事務局長
4	小島 天来 (令和5年12月まで)	株式会社荏原製作所 総務部 総務・社会貢献課
	澁谷 咲月 (令和6年1月から)	総務部 社会貢献課 兼務 総務課
5	吉藤 博和 【監事】	嶺町小学校校長 (うのき水辺の楽校協議会)
6	大橋 弘	大田区「文芸おおた」 部長
7	長岡 誠	大田区教育委員会 教育総務部副参事
8	東山 良彦	大田区教育委員会 教育地域力推進コーディネーター
事務局	① 森 敏彦	一般社団法人水のもり文化プロジェクト代表 安部龍太郎事務所
	② 山本 成俊	大田区教育委員会 教育地域力推進コーディネーター 安部龍太郎事務所 補助スタッフ
	③ 榊原 博	同上 教育総務課 教育地域力推進担当係長
	④ 原田 美咲	同上 教育総務課 教育地域力推進担当係員
	⑤ ミヨン・スジン	一般社団法人水のもり文化プロジェクト 補助スタッフ
	⑥ 西村 裕美子	一般社団法人水のもり文化プロジェクト 補助スタッフ